

あやつり心中

小松左京

あやつり心中
小松左京
徳間書店
(10/31刊・¥1200)

十年前の作品一篇の他、主に五年前から現在まで、計七篇を収めている。

標題作はSFではない。元禄のころ、道頓堀の人形芝居小屋を舞台に、下働きの女ぬいと、小屋の主人に助けられた太平の、心中の物語である。当時の道頓堀の芝居小屋や、人形からくりの風俗などを絡め、独特の雰囲気を感じさせる。ミステリ風の「犯人なおもて救われず」は、タイムパラドクスをアイデアにしたもの。同系統の「凶銃」は、オカルトミステリという感じ。「星仏」は、江戸期の山深い小村が、地震で異星へと転移し、そこで生きていこうとするが、ついに滅びていく有様を描いている。結末が物悲しい。

「花型星雲」は、巻末を飾る中篇。はるか十万年の未来、さまざまな文化が混交しているが、社会の変化は事実上停止状態にある。そんな中で、月見の宴がはられ、たかきすのう新能がしつらえられる。——しかし、その席で、奇妙な現象が起っていることが、知らされる。

「星仏」「花型星雲」それに標題作が、集中のベストになるだろう。ただし、「花型星雲」はもう一步踏み込んでほしかった。このアイデアは掘り下げる価値が十分ある。

(俊)